

「圧巻」という日本語があります。難しいことばなので聞いたことがない、という人も多いのではないのでしょうか。でも、もしかしたら野球好きの人なら知っているかも。なぜかという、このことばは野球の記事や実況解説の中によく登場するからです。

田川は、三振15個を奪う圧巻のピッチングを見せた。
こんな感じで使われます。

圧巻とは「飛び抜けて優れている」という意味のことばで、その試合で田川投手のピッチングは誰よりも素晴らしかった、ということを表わしています。

でもこの圧巻ということばが、暮らしの中の出来事を表わすことは、ほとんどありません。夕飯のカレーが美味かったからといって「お母さん、今日のカレー、圧巻のクッキングだったね」などとは言いません。圧巻は、日常生活ではない、試合や、演奏会、演劇といった特別な場での活躍に対して使われるものであり、それらの話題に触れることによって、出会うことができることばなのです。

私たちは、年齢とともにたくさんのことばを覚えていきます。でも決して、辞書を引いて覚えるわけではありません。そのことばが使われる場面を繰り返し経験する中で、自然と意味やニュアンスを理解していくのです。

**お父さんがお皿を全部洗って、「ようし完了！」って、
今日も言ってたけど、終わった、ってことかな。**



毎日の生活で使われることばなら、こんなふうに覚えていきます。でも、それだけでは、ことばは広がりません。スポーツ・芸術など、社会のさまざまな出来事に興味を持ち、それらについての話を聞き、文章を読むことによって、ことばはより細かく豊かになっていくのです。

学校の勉強も、ことばを広げる大きな役割を担っています。算数には算数の、漢字には漢字の、その勉強の中でよく使われることばがたくさんあるからです。勉強の目的は、かけ算のやり方や漢字の読み方を覚えるだけではありません。その勉強を通して、私たちは日本語を学んでいるのです。
～おはなし読解ワーク上級編【説明文集】「広がることば」より～

以上は、以前製作した、読解教材の文章を抜粋したのものです。ことばはとくべつな学習によってではなく、生活のなかで自然に育っていくもの、という趣旨が、今回のお話と重なると思い序文にしました。難しいことばを例にしていますが、未熟さの強い子どもの言語発達でも仕組みは変わりません。

ことばは人とともに生きていて、目や手と同じように体の一部である。と、最近強く感じます。近頃は人の名前や地名がパッと出てこなくなりましたが、それもまた変化しつづける自分のことばなのでしょう。